

2019年度

「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業

シンポジウム

～教育機関で求められる手話の専門性と資格制度化の可能性～

報告書

2020年2月16日(日)

高崎市総合保健センター 2F第1会議室

目次

1. オープニング	5
2. 事業成果報告	9
2.1. 全体概要	10
「事業成果報告（全体概要）」	10
金澤 貴之（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 教授）	
「『オンライン学術手話通訳教材集』の効果的な使い方」	13
中野 聡子（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 准教授）	
「関西学院大学ビデオメッセージ」	19
松岡 克尚氏（関西学院大学 人間福祉学部 社会福祉学科 教授）	
2.2. 手話通訳養成の取り組み	21
「構文指導のためのテキスト開発と授業実践」	21
下島 恭子（群馬大学 大学教育・学生支援機構 学生支援センター 産学官連携研究員）	
「着実な技術習得のための通訳カリキュラム再編成」	27
能美 由希子（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 助教）	
2.3. ろう重複障害者支援者養成の取り組み	33
「盲ろう者支援者養成カリキュラムの導入」	33
甲斐 更紗（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 助教）	
「『なかま企画』実施の意義」	36
二神 麗子（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 助教）	
3. 行政説明「手話の資格化をめぐる諸課題」	41
「聴覚障害教育の専門性の向上に向けた課題」	42
佐々木 邦彦氏（文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育企画官）	
「教員の専門性を向上するための体系的・効率的な学びに向けて」	72
長谷 浩之氏（文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許企画室長）	
「手話通訳士・者養成の現状」	83
塩野 勝明氏（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 企画課 自立支援振興室長補佐）	
4. パネルディスカッション「教員養成に求められる手話のスキルとは？」	99
ファシリテーター	
金澤 貴之（群馬大学 教育学部 障害児教育講座 教授）	
パネリスト	
今井 絵理子氏（内閣府 大臣政務官）	
久川 浩太郎氏（筑波大学附属聴覚特別支援学校 教諭、群馬大学 教育学部卒業生）	
秋山 奈巳氏（川崎市立聾学校 教諭、群馬大学大学院 教育学研究科専門職学位課程修了生）	
5. クロージング	123

1. オープニング

1. オープニング

司会（川端）／

本日はお集まりいただき、ありがとうございます。

これより、日本財団助成による「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業シンポジウムを開催いたします。本日、総合司会をさせていただきます、川端伸哉と申します。本事業のスタッフとして、群馬大学にて日本手話の実技指導などの担当をしております。

また、本日の総合司会の読み取り通訳は、本学手話サポーター養成事業の3年間の講義を修了した、学部3年生の2人の学生にお願いしております。とても緊張しているかと思いますが、どうぞ皆さま、温かい目で見守っていただければ幸いです。

本日は、群馬県手話通訳派遣事務所、株式会社 comm・プラス（コム・プラス）による手話通訳、キャブショニング・ペガサスによる文字通訳、S&C（エス・アンド・シー）による会場設営、そして株式会社プラスヴォイスによる遠隔通信のご協力を頂き、シンポジウム運営を行っております。一日どうぞ、よろしく願いいたします。

それでは、「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業シンポジウムの開始にあたり、国立大学法人群馬大学理事の峯岸より、開会の挨拶を申し上げます。

開会挨拶

峯岸／

ただ今ご紹介いただきました、群馬大学理事 副学長の峯岸と申します。足元の悪いところ、多数の方のご参加をいただき、ありがとうございます。

本シンポジウムの開催にあたり、群馬大学を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

本事業は日本財団の援助を受け、群馬県と共催で、学術手話通訳に関する事業を進めているものです。2017年度に始まり、学術手話技術を習得した学生を育てていくだけでなく、地域の手話通訳者の研修、技能向上を進めるものを目指してきました。そして本年度からは、新たに聴覚障害に加え、その他の障害を併せ持つ、ろう重複障害者の支援者養成にも着手し、現在に至っております。

本日、第3回目のシンポジウムを開催できる運びとなりました。この間の事業展開、これは一重に日本財団からの厚いご支援があったからこそと考えています。ここに厚く御礼申し上げます。

また、本学との共同事業として参加いただいている群馬県のご協力にも感謝申し上げます。群馬県は県内の市町村を含め、手話言語条例を制定しており、様々な支援が行われています。本事業を通し、本学が群馬県内の聴覚障害のある方の生活の質の向上に寄与し、地域の活性をより一層強くしていくことを願っております。

本日のシンポジウムが、ここにご参加いただきました皆さまが関わっておられる、聴覚障害のある人々との共生、地域の特別支援教育・障害者福祉の体制構築の一助となることをお祈りし、群馬大学を代表としての挨拶と代えさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。



来賓紹介(1)

司会／

ありがとうございました。次に、来賓のご紹介をいたします。

参議院議員 音喜多 駿 様

宮路 拓馬 衆議院議員 秘書 木村 颯 様

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害福祉専門官 秋山 仁 様

群馬県 健康福祉部 障害政策課 課長 井上 秀洋 様

群馬県教育委員会 特別支援教育課 補佐 近藤 千香子 様

高崎市議会議員 片貝 喜一郎 様

伊勢崎市議会議員 高橋 宜隆 様

高崎市 福祉部 障害福祉課 課長 千明 浩 様

本事業で大変お世話になっております。公益財団法人 日本財団の方をご紹介します。

筒井 智子 様

親松 紗知 様

以上で紹介を終わります。ありがとうございます。

それでは、プログラムを進めて参りたいと思います。

まず、基調報告といたしまして、群馬大学教育学部障害児教育講座教授の金澤貴之よりご報告をさせていただきます。

本事業がスタートして4月で4年目を迎えようとしておりますが、3年間の実践、成果等を総括してお話いただき、本シンポジウム全体の方向性を示していただきます。よろしくお願いいたします。

2. 事業成果報告

2. 事業成果報告

2.1. 全体概要

事業成果報告(全体概要)



金澤 貴之
群馬大学 教育学部 障害児教育講座 教授

皆さん、おはようございます。群馬大学の金澤と申します。私のほうから、事業全体の概要についてお話したいと思います。

日本財団助成事業「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」シンポジウム

事業成果報告（全体概要）



私の話はできるだけ短くしたいと思います。理由は、昨年度の場合は、私が1時間ぐらいかな、長い時間話をしましたが、今回はそれぞれの役割分担ができておりますので、担当者毎に事業の細かいことは報告できればと思うからです。…というのは、表向きの理由でして。私が去年、話をした時、時間をどんどんオーバーして、後でスタッフに怒られました。「金澤しゃべりすぎだ」と言われて、今もそのへんにタイムキーパーがかまえていて、「早くやめろ！」みたいな札を用意して待ち構えております。(笑)

なので短く話を切り上げます。

まず1つ。先ほど司会の川端からの説明で1つだけ

訂正があります。本事業、4年目ではなく3年目です。このことが、これからお話することの大きな鍵となります。

さて、みなさまのお手元にあると思いますが、手話のテキスト「やってみよう 日本手話」の①と②。こちらが今年度の事業成果の大事な1つであり、皆さまへの「おみやげ」でございます。

でもこれ、おみやげの1つでございます。

まだまだ、もっと大きなおみやげがありますよ。それは…今日のいろんな話を頭に入れて、それを「お持ち帰り」いただくことです。あらみなさん。まだもっとお土産をもらえると期待しました？(笑)

では、事業内容についてお話しします。本事業は大きく2つに分かれています。学生の手話サポーター養成と、地域手話通訳向けの研修の2本だてです。

ただ、地域手話通訳者向けの研修はこれまでのところ、細々と行っていました。なので、今回は学生手話サポーター養成に絞って説明します。

まず1年生の時に、基本的な日本手話の会話能力の習得を目指します。本日の「おみやげ」は、そのために作成したテキストなわけです。そして、2年生から3年生前期までに厚生労働省の手話通訳養成カリキュラムを修了します。今年度が3年目ということつまり、今年度第1期生がここまで到達したということになるわけです。先ほど司会からの紹介にあったように、本日のシンポジウムの一部の読み取り通訳を、まさの

その一期生の学生の2人が担当しています。

そして来年度目指すべきはこちら。学術手話サポーターとして、学内の手話通訳活動に参加するとか、更には、手話通訳資格取得者が現れたら、地域の通訳活動に出ることもアリかなと思っているわけです。私の目の前の学生2人が、「マジかよ?」という顔をしています。

更に今年度から新しい事業が加わりました。盲ろう者支援も含めた、ろう重複者の支援です。ですので、事業名を変更しました。「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業でしたが、今年度からは、「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」となりました。

事業内容... 学生の手話サポーター養成+地域通訳者向け研修

手話サポーター養成とは?

- 1年次：基本的な日本手話の会話能力を習得
- 2年次から3年次前期まで：厚労省手話通訳養成カリキュラムを修了...今年度、ここまで到達!
- 4年次：学術手話サポーターとして学内の手話通訳活動に参加。
さらに手話通訳資格取得者は地域の手話通訳活動も
さらに今年度からは...**聾重複者(盲ろう者)支援者養成も**

「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業から
「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業へ

次に手話検定試験の結果ですが、昨年度とあわせれば、全体としては増えています。今年度は特に力を入れたのが1年生のうちに、4級、5級でもいいから、試験をとにかく受けさせる。これには大きな意味が2つあります。1つは、1年生のこのタイミングというのは、まだ授業を十分に受けていません。そこで、上手くないけど、とにかく受けろと勧めます。なんか資格を持つと自信ができるじゃないですか。でもですね、もっと上手くなってくると、4級、5級では恥ずかしいと思ってくるんですよ。そうすると、2級、3級、そして1級を目指すことになるだろうと。これが裏の狙いなわけですね。

**2019年度 第14回全国手話検定試験
群大学生の受験結果**

	1年	2年	3年	4年・院・農	合計
準1級		2			2
2級	1	7	1	1	10
3級	1				1
4級	12				12
5級	10				10
合計	24	9	1	1	35

そして、群馬県の統一試験の受験案内に我々の事業が明記されました。出願条件のAに入っていることに大きな意味があります。群馬県での養成修了者と同等であると県が認めると。

群馬県の統一試験受験案内に明記

令和元年度手話通訳者全国統一試験受験案内

令和元年度手話通訳者全国統一試験(全国手話研修センター)を次のとおり実施いたします。

- 1 試験の日時
令和元年12月7日(土) 午前10時から (受付時間 午前9時~9時30分)
- 2 試験会場
群馬県社会福祉総合センター (前橋市新前橋町13-12)
- 3 試験内容
ア 筆記試験
イ 実技試験 (手話の要約・場面通訳)
- 4 受験資格
次のいずれかに該当する者で、群馬県内で手話通訳者として活動出来る者
ア 手話通訳者養成課程修了者
(群馬大学の「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」の修了者を含む)
イ 手話通訳者養成課程修了者と同等の知識及び技術を有する者
ロ 国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科・学校法人大泉学園世田谷福祉専門学校手話通訳学科の卒業生(卒業見込み可)

次。群馬県教員採用試験に、手話通訳士あるいは群馬県登録手話通訳試験合格者には加点することは、昨年度お知らせしましたが、その点数が明らかになりました。全体で150点満点のうちの10点。これは大きいです。

**群馬県教員採用試験に加点
○平成30年度実施(平成31年度採用)の主な変更点**

10点!
○所有資格による**加点制度**

手話通訳士の資格を有する人又は群馬県手話通訳者認定試験合格者には、第1次選考において加点します。

手話通訳者としての取組として実施!

手話通訳士の試験問題に！

20 平成29(2017)年度から群馬大学が助成を受けて行っている手話に関するプロジェクトを、下の中から一つ選びなさい。

1. 学術手話通訳に対応した通訳者の養成事業
2. 国際手話教育及び通訳養成のための教材開発事業
3. 若年層の手話通訳者養成モデル事業
4. 手話教育教材開発事業

次は、我々がやったことじゃないですが、ビックリしたことを。手話通訳士の試験問題に、なんと、我々の事業名が問われたんです。これは当日知って、ホントにびっくりしました。でも、もっとビックリしたのが…群大生の受験者の中で、間違えた学生がいたことです。(笑)…残念です。事業名を外にPRするだけじゃなく、「足元を見る」という話ですね。意外と学生は事業名を知らないんだなと。学生からすると、「手話サポーター養成プロジェクト」なんですね。

そして文科省による法人評価で、我々の事業を特出ししていただいた。実に細かく書いていただいています。

文部科学省による平成30年度法人評価に特出し！

平成30年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人群馬大学

1 全体評価

群馬大学は、北関東を代表する総合大学として、知の探求、伝承、実証の拠点として、次世代を担う豊かな教養と高度な専門性を持った人材を育成すること、先端的かつ世界水準の学術研究を推進すること、そして、これらを通して地域社会から世界にまで開かれた大学として国際社会に貢献することを基本理念に掲げている。第3期中期目標期間においては、基礎知識に裏打ちされた深い専門性を有し、地域社会での活動及び国際交流活動を積極的に推進できる人材を養成することや、多様な学術領域での独創的な研究を国内外の大学・研究機関と連携して進め、国際的な研究推進・人材育成のネットワークを構築し、研究拠点を形成すること等を目標としている。

この目標の達成に向け、学長のリーダーシップの下、大学における手話サポーターの養成を目的として、群馬県との共同事業である「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業を実施する等、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

文部科学省による平成30年度法人評価に特出し！

Ⅱ. 教育研究等の質の向上の状況

平成30年度の実績のうち、下記の事項について注目される。

○ 大学における手話サポーターの養成

学生支援者を手話通訳者として養成するシステムを全国的に浸透させ、かつ、大学での養成を可能とすることを目的として、平成29年度から日本財団からの助成により、群馬県との共同事業として「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業を実施しており、国公私立大学を通して初の手話通訳者養成モデル事業となっている。平成30年度は教養教育を受講した学生が延べ290名（うち手話習得者レベル20名）、専門教育を受講した学生が延べ18名であった。うち39名の学生が全国手話検定試験を受験し、全受験者がそれぞれ受験した級に合格している。

さて。私の方からは、事業の中身の話じゃなく、こんな動きがありましたというおおざっぱな話をしました。そして、本日、皆さまにお知らせしたいことがあります。

既にご存じの方もおられるでしょうが、新しいメンバーが1月から加わりました。12月まで大阪大学で仕事をされていて、障害学生支援の仕事の傍ら、主に関西地区の学術手話通訳の研修を精力的にされていた、まさに学術手話通訳のスペシャリスト、中野聡子先生を本学の准教授としてお迎えしました。

ここから中野先生にバトンタッチします。

ご紹介します。中野先生、どうぞ！

2. 事業成果報告

サプライズ(1) 「オンライン学術手話通訳教材集」の効果的な使い方

中野 聡子

群馬大学 教育学部 障害児教育講座 准教授



皆さん、こんにちは。

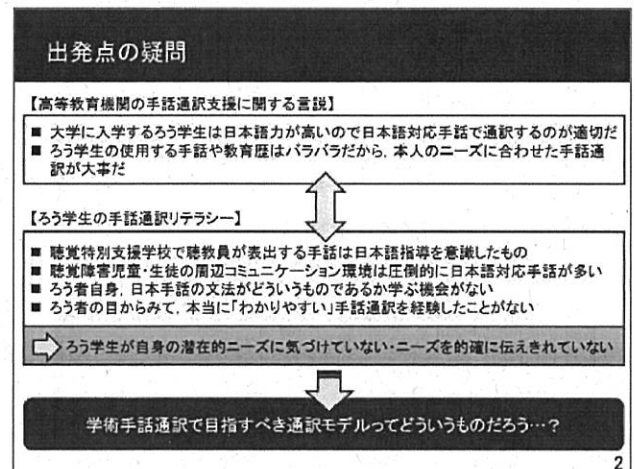
この度、9年ぶりに群馬に戻ってまいりました。12月に引越手続きで高崎市役所に行きましたら、障害福祉課の職員の方に「おかえりなさい」と言ってもらえて、とても嬉しかったです。



本日、皆さんへのおみやげとしてご紹介させていただきます「オンライン学術手話通訳教材集」ですが、これは関東から遠く離れた広島・大阪で大学教員として教育・研究に従事する中で、質の高い手話通訳はどういうものなのかということ、地域の通訳者に研究協力をいただいて、成果としてまとめたものです。

では、ご紹介いたします。

まず、出発点の疑問です (PPT2 参照)。

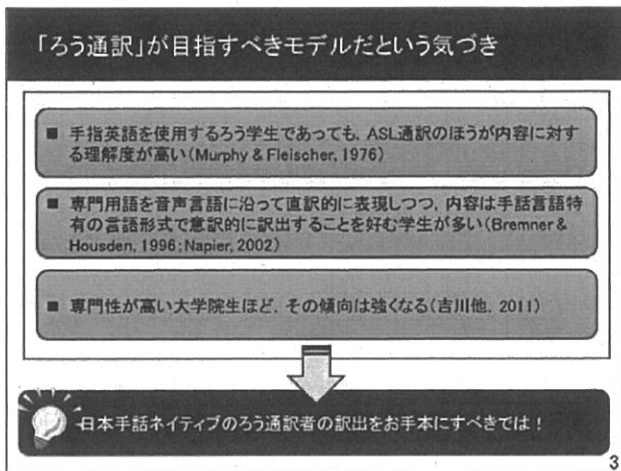


高等教育機関の手話通訳支援に関する言説でよくあるのは、「ろう学生は日本語力が高いので、日本語対応手話で通訳するのが適切だ」、「ろう学生の使用する手話や教育歴はバラバラだから、本人のニーズに合った手話通訳が大事だ」というものです。

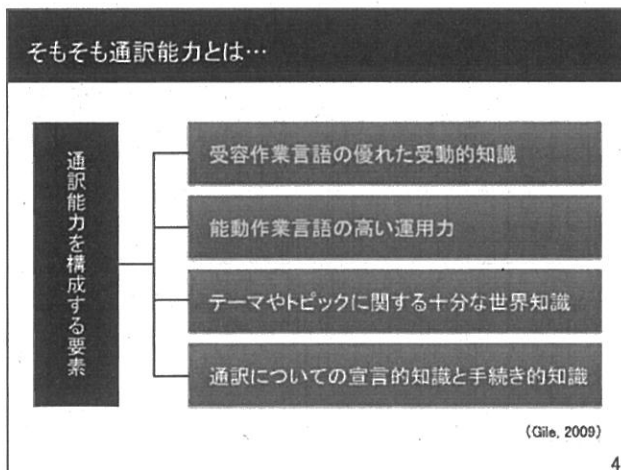
ところが、ろう学生は、それまで手話通訳を受けた経験がない人がほとんどです。そのため、どのような通訳をしてほしいかという潜在的ニーズに気づけていなかったり、そのニーズを的確に伝えられていなかったりします。また、わかりにくい手話通訳を見て、わからないのは自分の理解力のせいだと思い込んでしまったり、学術的な内容を日本語で通訳するのは難しいのだと誤解してしまうこともあります。つまり、ろう学生側の手話通訳リテラシーの不十分さという問題もあるわけです。

そうすると、手話通訳者に聞いても、ろう学生に聞いても、これが目指すべき理想の通訳だ、というもの

は見えてこないわけで、学術手話通訳養成の到達目標をどこにおけばいいのかわからず、袋小路に入り込みました。



では、学術手話通訳で目指すべき通訳モデルとはどのようなものでしょうか。そのヒント、きっかけを与えてくれたのが、ご紹介する国内外の研究報告です (PPT3 参照)。どんなに学術性が高い内容であっても、訳出には、日本手話の要素が必要だということに気づきました。ならば、日本手話ネイティブのろう通訳者で、かつかつ学術的内容を理解する力を有している人の訳出をお手本にすべき、ということになります。



通訳能力は、4つの要素で構成されています (PPT4 参照)。

1つと2つめの「受容作業言語の優れた受動的知識」、「能動作業言語の高い運用力」は、端的に言うと、日本手話と日本語の十分な力があるかどうか、ということです。

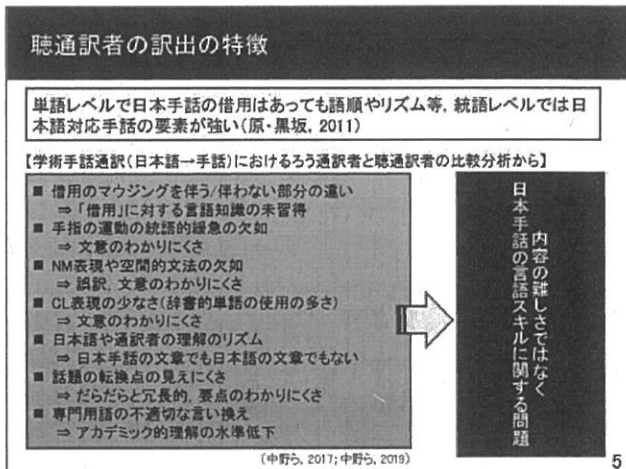
3つめの「テーマやトピックに関する十分な世界知識」は、通訳内容に関する様々な背景知識のことを指しています。

4つめの「通訳についての宣言的知識と手続き的知識」は、2つの言語の変換をスムーズに処理できるか

どうかという、通訳スキルに関するものです。

ベテランの通訳者であれば、1と2と4については高いスキルを有しているはずで、ということ、学術手話通訳には、3つめのスキル、つまり、どのように事前準備をすれば良いかというテクニックを身につければ良い、ということになります。

ところが、ろう通訳者と聴通訳者の訳出の違いを分析してみると、聴通訳者の訳出は、事前準備スキル以外のところにあることが明らかになりました。



手話通訳者のみなさんは、専門的内容だから通訳が難しいとおっしゃいます。もちろん事前準備の難しさはあるのですが、通訳の受け手であるろう者からみると、そのこと以上に、日本手話の言語スキルが不十分で、正確かつ、手話としてわかりやすく訳せていないという問題があるわけです。

聴通訳者の訳出の特徴について、具体例を挙げます (PPT5 参照)。専門用語の訳出には、「借用」が必要です。借用表現は、マウジングや指文字、手話単語への置き換えなどの手段がありますが、これらが適切に使分けられていなかったり、借用であることがわかる手指の動きや NM がなかったりという現象が見られました。他には、CL 表現、NM 表現、空間的文法などが十分表出されていませんでした。そのため、文の意味や話のポイントがわかりにくくなっていました。こうした通訳でも必死に足りないところやわかりにくいところを文脈からの想定や自分の持っている知識で補ったりしながら、なんとか意味をつかむことはできるのですが、ろう通訳だと、言っていることの意味やポイントが、ずっと頭に入ってくるのですね。

ろう通訳と聴通訳の訳出表現の相違から、手話通訳者のみなさんに通訳スキルとして学んでいただきたい日本手話の要素を抽出して教材集にしたのが「オンライン学術手話通訳教材集」です。

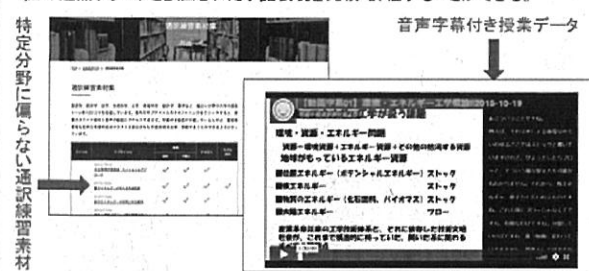
本教材集の特徴について、4点ご紹介いたします。

教材集の特徴① 幅広い分野の講義シーンを収録した通訳練習素材集

国語学、経済学、法学、生物科学、工学、情報科学、統計学、数学など、幅広い分野の講義シーンを通訳練習素材として収録している。一部には、字幕版テキストや字幕動画が付属しており、聴覚障害者も音声日本語の起点テキストと訳出された手話表現を比較・評価することができる。

音声字幕付き検索データ

特定分野に偏らない通訳練習素材



6

1つめの特徴は、大学の共通教育の授業を収録した通訳練習素材集です (PPT6 参照)。100 近い講義が収録されているのですが、幅広い専門分野から収集しました。これらは、学術手話通訳のトレーニングをした人だけでなく、例えばグラフの特徴をわかりやすく示す手話表現など、聴覚特別支援学校の先生方が、教科指導の参考にすることもできます。

教材集の特徴② 日本手話母語話者によるモデル通訳

通訳練習素材集の一部を抽出し、通訳者によるモデル通訳集として掲載した。モデル通訳集は、学術場面に多い場面(「専門用語が多く含まれる説明」「図表を利用した説明」等)をとりあげた『場面を選ぶ』と、訳出において必要な日本手話特有の表現(「CL表現」「引用表現」等)をとりあげた『訳出表現で選ぶ』の2つに分かれている。


場面を選ぶのコンテンツ一覧

モデル通訳

授業スライド

字幕

訳出のポイント解説



7

2つめの特徴は、通訳練習素材集の一部を抽出し、日本手話母語話者によるモデル通訳集を作成していることです (PPT7 参照)。モデル通訳には、訳出のポイントについて解説を載せています。

教材集の特徴③ 用語集

手話通訳者の多くは、日本手話の文法知識が不十分である。そのため、モデル通訳集や特別公開セミナーの解説で使われている日本手話文法に関する専門用語について用語集にリンクを貼り、用語を理解しながら解説文を読むことができるようにした。

専用動画


エスコピー

マウジング(mouthing)

用語集へリンク

登録言語

レジスター (register)



8

3つめの特徴として、モデル通訳等の解説で用いられている日本手話文法に関する専門用語には、用語集にリンクが貼ってあり、用語を理解しながら解説文を読めるようにしています (PPT8 参照)。

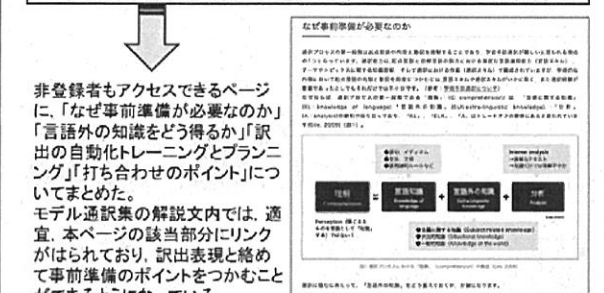
教材集の特徴④ 事前準備のポイント

学術手話通訳では起点テキストの意味をつかむこと、すなわち事前準備のあり方が通訳パフォーマンスに大きく左右する。

なぜ事前準備が必要なのか

非登録者もアクセスできるページに、「なぜ事前準備が必要なのか」「言語外の知識をどう得るか」「訳出の自動化トレーニングとプランニング」「打ち合わせのポイント」についてまとめた。

モデル通訳集の解説文内では、適宜、本ページの該当部分にリンクがはられており、訳出表現と絡めて事前準備のポイントをつかむことができるようになっている。

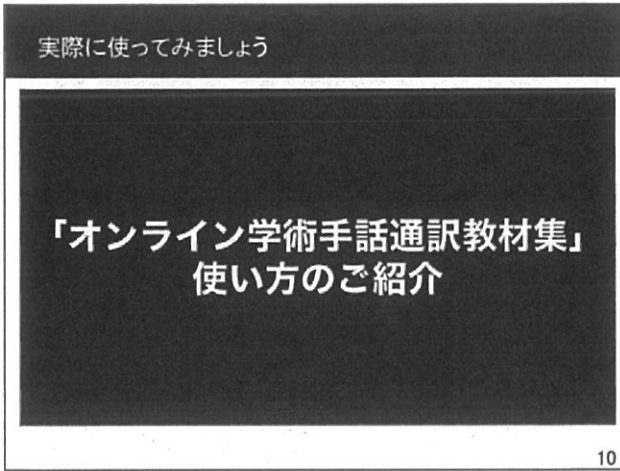


9

最後、4つめの特徴は、学術手話通訳に必要な事前準備の行い方をまとめたページを掲載していることです (PPT9 参照)。

先ほど、学術手話通訳では、通訳能力を構成する4つの要素のうち、特に3つめ「テーマやトピックに関する十分な世界知識」が必要であると話しました。学術手話通訳では、起点テキストの意味をつかむこと、すなわち事前準備のあり方が通訳パフォーマンスを大きく左右します。解説文内にリンクが貼られており、モデル通訳の訳出表現と絡めて事前準備のポイントをつかむことができるようになっています。

では、オンライン学術手話通訳教材集の使い方を、動画でご紹介します。

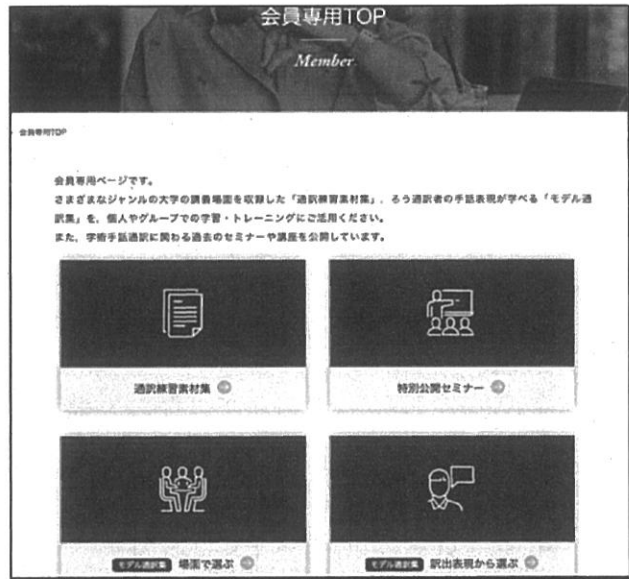


(動画開始)



ナレーション／

みなさん、こんにちは。「オンライン学術手話通訳教材集」の使い方についてご紹介します。



「オンライン学術手話通訳教材集」の会員専用ページでは、様々なジャンルの大学の講義場面を収録した「通訳練習素材集」、ろう通訳者の手話表現が学べる「モデル通訳集」、そして、学術手話通訳に関わる過去のセミナーや講座を公開しています。

ここでは、モデル通訳集を使った自主トレーニングの方法例をご紹介します。



まず通訳練習素材集から自分がトレーニングをしたいジャンルに近い内容を、テキストで確認して選んで下さい。



「場面から選ぶ」や「訳出表現から選ぶ」で素材を選ぶこともできます。



テキストを読んで、わからない内容を調べたり、適切な訳出表現を検討します。



ビデオカメラやスマートフォン、タブレット・パソコンなどで、自分の訳出を撮影します。



自分とろう通訳者の訳出表現を比較します。解説を参考に、自分自身の訳出表現について分析を行い、改善点を整理します。

学習者／

ろう通訳は、否定の首ふりのNM表現が出ていることで、文意が伝わりやすいと思いました。でも、自分は否定の首ふりが出せておらず、単語の「ない」で表すだけだったので、もっとしっかりNMを出せるようにしたいと思いました。

また、ろう通訳は訳出にスライドの家族図が再現されていて、誰から誰に、いくら相続されるのかすごくわかりやすいなと思いました。このような空間の使い方を自分が訳出することができるようにしたいなと思います。



ナレーション／

シャドーイング等により、ろう通訳者の訳出表現を練習します。特に、CL表現やNM表現、空間の使い方、文章構成、リズムに注目しましょう。

能美さん、やってみてどうでしたか？

学習者／

ろう通訳と自分を見比べると、自分の弱点だけでなく改善例もわかるので、より良い通訳を目指して今後もコツコツと勉強していきたいと思います。

----- (動画終了) -----

中野／

動画をご覧いただき、ありがとうございました。



QRコードは資料にも載せてありますので、是非登録していただければ幸いです。手話習得や通訳のトレーニング、様々な場面でお役に立てると思います。

また、こうした教材集制作にあたって得られた知見を、今後の群馬大学手話サポーター養成プロジェクト事業のさまざまな側面で反映させていければと思っています。

以上で、発表を終わります。

引用文献

- Gile, D. (2008) Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. [田辺孝久子・中村昌弘・杉磯勝子(訳)(2010)「通訳訓練—基本的概念とモデル」みすず書房]
- 原大介・黒塚美智代(2011)日本における中間型手話(ハイブリッド)手話なのか。電子視覚通信学会技術研究報告, WVT, 福祉情報工学, 110(418), 31-35.
- Murphy, H. J. and Fleischer, R. (1976) Effectiveness compared with test score of ASL interpretation and transliteration. Murphy, H. J. (Ed.) Selected readings in the integration of deaf student at CSUN, California State University, Northridge. Center on Deafness.
- Napier, J. (2002) University interpreting: Linguistic issues for consideration. Journal of Deaf Studies and Deaf Education 7(2), 281-301.
- 中野聡子・佐藤晴・原大介・綿井祐子・川崎和子・隈田伸子・金澤貴之・伊藤愛里・橋本太・望月直人・豊紡裕恵子・吉田和子(2017)「学術手話通訳における日本手話要素の表出に関する分析—ろう通訳者と聴通訳者の比較から—」『大阪大学高等教育研究』 6, 1-13.
- 中野聡子・佐藤晴・原大介・金澤貴之・綿井祐子・川崎和子・橋本太・望月直人(2019)「学術手話通訳における原語信用の分析」『通訳研究への招待』 20, 141-158.
- 中野聡子・原大介・金澤貴之(2019)「オンライン学術手話通訳教材集の制作」日本特殊教育学会第37回大会論文集, CD-ROM版.
- 吉川あゆみ・石野有衣子・松崎文・白澤麻由・中野聡子・岡田幸和・本田健康(2011)高等教育における手話通訳の活用に関する研究—学術的実証の高度化に対応するための手話通訳の技術的ニーズに着目して—, 日本社会福祉学会第59回秋季大会予稿集, 461-462.

金澤／

ということで、中野先生が加わりまして、我々、大きくパワーアップすることと思います。

皆さん、是非、本日お配りした資料集のQRコードを読み取って、是非、素材集をご自身で体験していただければと思います。これが本日、2つ目の「おみやげ」です。

先日、関西の通訳の方とお会いした時に言われました。「金澤先生、関西は中野先生ロスであります。さみしいです」と。まるで私の責任のように言われてしまいました。

ここにいらっしゃる皆さんの中にも関西からいらっしゃる方もおられると思いますが、ご安心下さい。中野先生が群馬に来られたことで、群馬県だけが独り占めするわけではなく、来年度から全国に学術手話通訳等、諸々の形で情報発信していきます。

最初に申し上げましたが、今までは学生のサポーター養成が中心でした。地域手話通訳養成は細々とやっていたのですが、中野先生が加わることで、来年は更にパワーアップします。

我々のことを温かく見守っていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

あ…もう1つありました。

今後に向けて、もう1つ、ご報告があるんです。

こちらをご覧ください。

サプライズ(2) 関西学院大学ビデオメッセージ

松岡 克尚 氏

関西学院大学 人間福祉学部 社会福祉学科 教授



----- (動画開始) -----

前川／こんにちは、関西学院大学手話言語研究センター研究特別任期制助教の前川です。

突然、何だろう？と思っている方も多いでしょう。その理由は最後まで見ていただくと分かりますので、しばらくお付き合いください。

最初に私の所属する「関西学院大学手話言語研究センター」の紹介をさせていただきます。

本センターは、2015年に設置され、2016年度より日本財団の助成金を受け、活動しており、手話言語に関する科学的、学術的研究を行い手話の言語としての位置付けを学術的に確立すること、及び社会的認知度を高めることを目的に設置されました。

活動は、主に次の3つを軸に行っています。

① 研究活動、②教育活動、③普及活動。

具体的には、「手話言語学基礎・専門」、「手話の世界」といった講座。講話会、国際フォーラムなどの講演会。文化イベントや手話学コロキウム。

これらの外部発進とともに、研究を行うことで学術的な手話言語の位置づけを確固たるものにしていく方針です。年度末には、研究成果報告会を開催しています。

ここで研究メンバーの紹介をしたいと思います。

松岡／センター長 松岡です。よろしくお願いします。

森本／センター副長 森本です。よろしくお願いします。

山本／研究員 山本です。よろしくお願いします。

今西／研究員 今西です。よろしくお願いします。

下谷／研究特別任期制助教 下谷です。よろしくお願いします。

平／専門技術員 平です。よろしくお願いします。

中島／客員研究員 中島です。よろしくお願いします。

前川／以上の研究員が手話言語に関する研究を行っています。

最後に松岡センター長よりお話があります。

松岡／ご存知のように、日本ではこの10年の間で、大学における手話研究の拠点がいくつか形成されてきました。それぞれがこれまで非常に優れた実績を積み重ねてこられています。今後は、そうした拠点となる大学・機関の間の連携が重要になってくると考えています。連携することでそれぞれの大学・機関が有する資源を相互に活用することが可能になり、相乗効果が生まれてくることを期待されます。それによって、日本の手話言語研究や手話教育も一層発展していくものと信じていると思っています。

こうした連携の意義を覚えて、今回、群馬大学さんと私たち関西学院大学手話言語研究センターの間で、3つの点で連携し共同の取り組みを行っていくことを予定しております。

1つ目は、共同研究になります。それぞれの大学でこれまで培ってきたリソースを相乗的に用いながらいっそう優れた研究を果たしていくことが出来ればと思っています。

2つ目は、両大学の学生の交流イベントの開催です。スタッフだけではなく、それぞれの大学で学生たちがネットワークを形成していくことができればと期待しています。

そして、最後の3つ目は、共同でのシンポジウムや研修会の開催になります。こちらは2020年度の後半に両大学の共催という形でシンポジウム等を実施することを検討しております。いずれとも詳しい中身はまだ決まっていますが、特に3つ目の合同でのシンポジウム、あるいは研修会については是非とも多くの皆様のご参加が得られればと願っています。決まり次第にお知らせしたいと思っていますので、どうぞ、よろしく願いいたします。

手話教育、手話研究もこれからは複数機関による連携、協働で取り組んでいく時代を迎えようとしています。私たちのこれからの取り組みが、1つのモデルになることを祈って、私からの説明を終えたいと思います。

前川／群馬大学と関西学院大学は、共同研究や講演、成果発表など今後の連携を模索していきます。どうぞ、よろしく願います。「One Team!!」(ワン チーム!!)

----- (動画終了) -----

金澤／

いかがでしたでしょうか。

関西の皆さん！むしろ来年度以降が楽しみになったんじゃないでしょうか？

ということで、私たち群馬大学のチームと、関西学院大学のチームはこれから“One Team”として、更に日本全体の学術手話通訳の底上げを進めていきたいと思います。

今後とも、ご支援のほどよろしく願います。

ありがとうございました！

司会／

ありがとうございました。

2. 事業成果報告

司会／

続きまして、事業成果報告をさせていただきます。

まずは、群馬大学 産学官連携研究員の下島恭子より「構文指導のためのテキスト開発と授業実践」について、報告いたします。

よろしく申し上げます。

2.2. 手話通訳養成の取り組み

構文指導のためのテキスト開発と授業実践



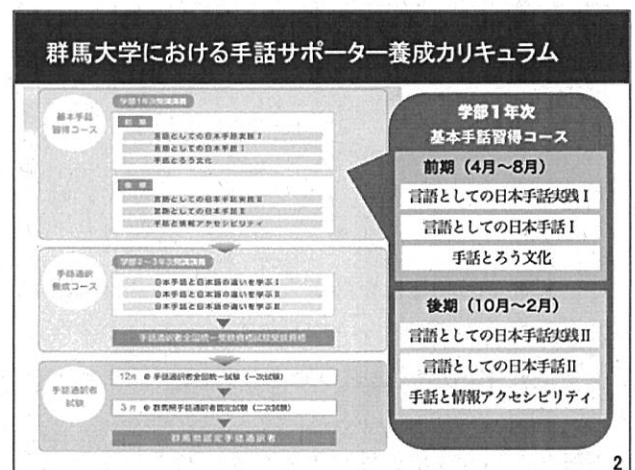
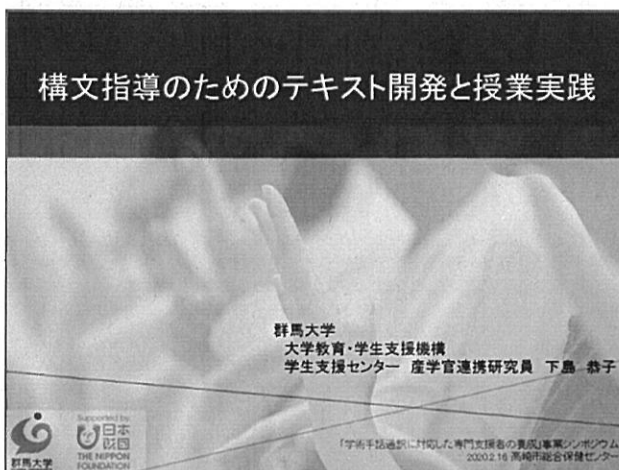
下島 恭子

群馬大学 大学教育・学生支援機構 学生支援センター 産学官連携研究員

ただ今、ご紹介いただきました下島 恭子と申します。群馬大学 大学教育・学生支援機構 学生支援センター産学官連携研究員をしております。

本日は、「構文指導のためのテキスト開発と授業実践」について、ご報告いたします。

学生達が手話を言語として学び、また手話通訳について学ぶためのカリキュラム内容を PowerPoint に示してありますが、これでは字が小さくて見づらいので、緑の枠の内容を青の枠に大きく表示してみました。青の枠に囲まれているのが1年次に行う授業になります。



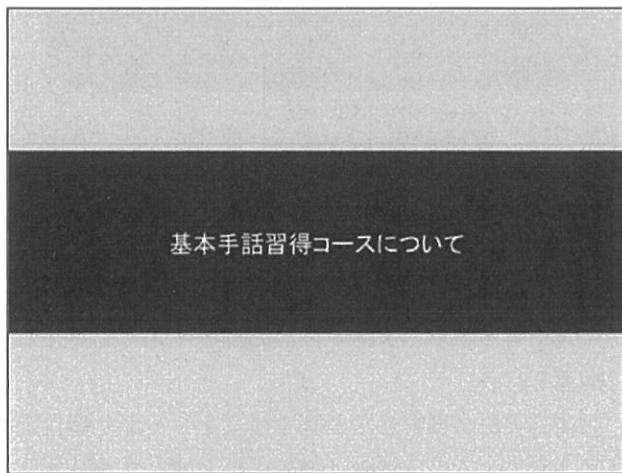
最初に、群馬大学における手話サポーターの養成カリキュラムの全体概要を説明します。

本学の手話サポーター養成事業は、日本財団の助成により行っている事業です。

手話に関する授業が前期に3つ、後期に3つ。このうち手話サポーター養成としては年間を通して2コマの授業を行います。それが「言語としての日本手話実践Ⅰ・Ⅱ」と「言語としての日本手話Ⅰ・Ⅱ」になります。前期・後期通して実技と理論を併せ学ぶ構成になっています。

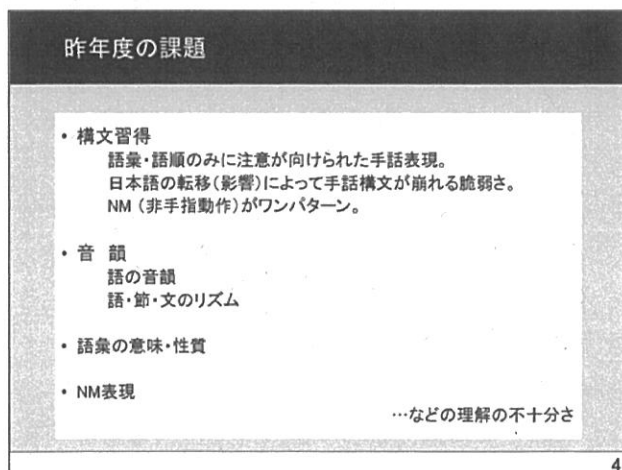
そして、2年次に上がりますと、オレンジの枠内で示したカリキュラムに移ります。ここでは翻訳と通訳に必要な技術を学び、最終の到達目標は認定通訳者受験資格を得られる手話通訳養成カリキュラム修了相当の力をつけることにあります。

今回、私が報告するのは1年次のカリキュラムの基本手話習得コースについてです。



皆さんにお配りした手話テキストは、1年次で学ぶ内容であり、手話の言語習得過程を考察しながら私どもで議論を重ね作られたものであります。

過去の授業を振り返り、その中で見受けられたいくつか課題を次に整理しました。



まず、構文習得についてです。

これは「1文をしっかり作ることが出来る力」と言えるものです。

文法的に通る文が作れるかどうかということが大事なのですが、ここで構文習得がうまくいっていないように見えました。語学として学んではいるのですが、学生たちの様子を見ますと語彙表現を中心に意識がいつているようでしたし、構文も語順を中心にしがちな学習傾向になっていたようでした。

基本となる手話文法の理解とそれを表現する力の双方の足りなさに由来する構文作成力の弱さが、語彙数に依存する状態を作ってしまう、その状態のまま学習を進めてしまっているところがありました。

結果として、第二言語学習において日本語の転移が高くなってしまい、日本手話の文法に沿った文章を作るのが難しくなっていました。

特に挙げるとすると、NMにはうなずき表現というのがあります。うなずき表現は日本手話において文法の役割がありますが、では実際にどういった動きであって、文脈においてどのような意味づけがあるのかを十分に理解できていないままでした。それでもうなずきは必要だということで文中に入れているのですが、所々日本語のリズムに引きずられてしまって、文法上のうなずきとの違いを学習者自身が判別できなくなり混乱しているようでした。ですので、ここで丁寧な指導が必要だと感じられました。

次に音韻に関して。

日本語の音韻と手話の音韻は違います。

単に言語が聴覚を用いる、視覚を用いる、といった違いだけではありません。手話の音韻は日本語とは違う形で語形が変わる部分があります。それについての理解も不十分でした。

例えば、複合語の音韻。複合語とは、二つの言葉が合わさって作られる一つの言葉のことを言います。手話を学び始める時、恐らくどこも最初のところで「よろしくお願ひします」というあいさつの言葉を教わると思ひます。この時に、手話の形は/良い/と/お願ひします/の二つで、この単語をあわせて、「よろしくお願ひします」という表現になることを教わります。

でも、ろう者は/良い/と/お願ひします/をただ並べて表すことをしていません。もしその様に表すならば、手話としては不自然な発音になってしまいます。

ここでは2つの語が複合され、/良い/の手型の最後のところで(音)が弱まりながら、/お願ひします/の手型と動きに移行する語形変化が起きています。こう

やっではじめて自然な発音に近づけることができると理解します。

また、節や文のリズムについては、例えば所有格を表すところで日本語は「～の」に該当するところですが、この文法の働きを日本手話で表そうと思ったら、「～の」の前後の単語を一続きに表現します。

「私の名前」と表したい時は、/私//名前/の2つの単語を一続きにひとかたまりとして表現するところになります。けれど、ここに日本語のリズムが入ってしまうと/私/と/名前/の間にある「の」のところで区切り・うなずきが発生してしまいます。そうするとどうなるか。「私の名前」ではなく「私と名前」となって、二つのものが存在する文になってしまいます。意味が変わってしまいますね。

もっと言うと、/私//名前/と一続きに表す表現の中で起きているわずかな音韻の変化が前後の語をスムーズにつなげている。そこでこの言葉は一つのことを表現しているのだと、見て分かるようになるのです。

このような語形の変化を学ぶうえで音韻の形と文のリズムの意識は大切なのですが、その辺りが充分認識されていないと感じました。

続けて語彙の意味性質を見てみます。

/まだ/という言葉为例にとってみますと、日本語にも、手話にもこの単語はありますね。それなら日本語と同じ様に使えそうだとするとそうではなくて、日本語の「まだ」と手話の/まだ/の間には、使い方も意味範囲も異なっているところがあります。

日本語としては「まだ学習しています」とも言えますし、「まだ学習していません」とも言うことができます。後に続く文がどっちであっても、両方「まだ」という単語が使える。しかし、日本手話の/まだ/は、ある目的・事柄に対して「そうならない・到達していない」という未然の範囲に用いられます。

日本手話では、/学習 まだ/と表現します。目的語が先に置かれて、目的に対してそうならないという意味として/まだ/という単語が続くのですから、「まだ学習している」という日本語のセンテンスにおいて、日本手話の/まだ/という単語は合っていないということになります。

この様な日本語と日本手話の語彙の違いが十分に理解されていないように思いました。

そして、NM表現。すなわち非手指動作というもの

が日本手話の文を作るために非常に重要な役割を担っています。では、どのようなNMの動きがあって文法上の働きがどうなっているのか、については具体的に理解できていなかったようでした。

これらの課題を踏まえて今後どのように指導するべきかを整理し、今年度の改善ポイントとして、次のように目標を立てました。

今年度の改善ポイント

改善目標

- ・ 日本手話学習を語学として捉え、言語的な理解を向上させる。
→ 日本手話が言語であることの理解
- ・ 基本構文の確かな習得
→ 日本手話の構文を体系的に理解・習得
- ・ 日本語の転移を最小限に抑制する。
→ 日本語と異なる言語であることをしっかり理解し、
接触言語(日本語対応また日本語の影響が強い言語)を
意識的に使い分けることを習得させる。

これらを念頭に指導につなげる

日本手話習得へのアプローチを
第二言語習得の理論を踏まえた上で取り組む
(中学英語教育を参考に)

5

日本手話が言語であることの意識を確立できるように、手話を1つの独立した言語として体系立てたカリキュラムを組み、手話の言語的理解の向上を目指して指導を行う。

次に、学生が日本手話の基本構文をしっかりと習得できるようにする。日常会話で最低限必要になる基本文型を整理し、文の仕組みを体系的に説明しながら言語習得の過程を確実に辿れるようにすること。

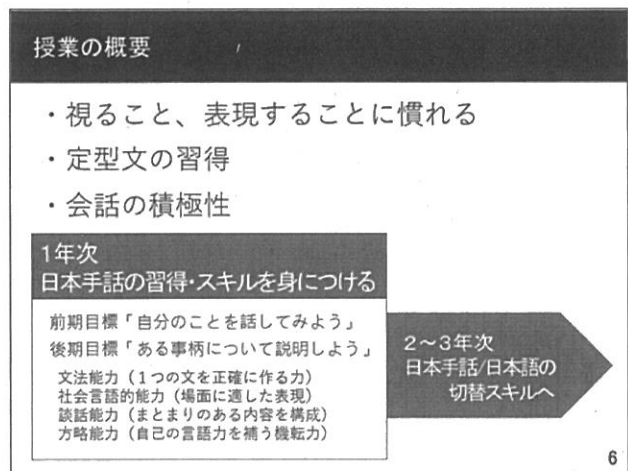
構文の力が弱まって語彙数や語順に依存する事態が起きないように、日本手話の正確な文を作る意識の強化を促す学びを確保することです。

そして、日本語からの転移を極力抑えるように、指導者が学習環境を工夫していくということです。

一般的な手話のテキストは、例文が日本語文で書かれているものが多いと思います。その例文を見ながら手話で表そうとすれば、日本語からの転移が非常に強く出た手話になってしまいます。けれども、日本語の文を手話の文に変える力の育成は、1年次ではまだ目標にしています。なによりまず手話を手話のまま理解できるようになることが最初の学習目標なので、ここで日本語が構文習得の防げになってしまわないように、なるだけ母語の干渉を押さえたい。ですから私どものテキストでは、極力日本語の文章を使わないようにして、例文はラベルを並べる形に留めています。

本来ならテキストを開いた時に日本手話の写真あるいは動画がパッと出てきて、それを確認しながら進められるのが一番の理想的な教材なのですが、それはできなかつた。それで別に動画を用意しました。まず動画で手話を視聴し、NM等の文法や構文作成確認では動画とテキストにあるラベル文の両方を用いて再確認が行えるようにしてあります。このようにテキストを使っているけれども、なるだけ日本語の転移が起きないように仕組みを工夫してみました。

でも、この日本手話は日本語の文だとこうなる、この日本語の文は日本手話ではこうなるという、言語の変換技術は必要なんじゃないかと思われるかもしれないのですが、この点は2年次で行うことだと考えています。日本語と日本手話の二言語を切り替えて翻訳する力は2年次の通訳技術で行います。1年次ではまず手話を手話のままで理解できる力を養うことに重点を置きます。日本手話の基本となる力を1年次にしっかり作ることが目標です。



事業の概要としては、この3つを目標として掲げています。

- 1つ目が視ること、表現することに慣れるということ。
- 2つ目が定型文を習得すること。
- 3つ目が、1と2とで日本手話に慣れていき、会話に積極的に入っていけるようになること。個人の積極性を伸ばすこと。

こういった技術・スキルが順に身につくように、最初の前期目標を「自分のことを話してみよう」と設定しました。

後期では「自分以外の事柄について説明しよう」というテーマを設定し、それに対応できる力が身につくことを目標にしました。

この時に育てる力としては、まず、文法能力。1つの文を正確に作る力。そして社会言語適応力。これは場面場面に適した表現ができる力になります。

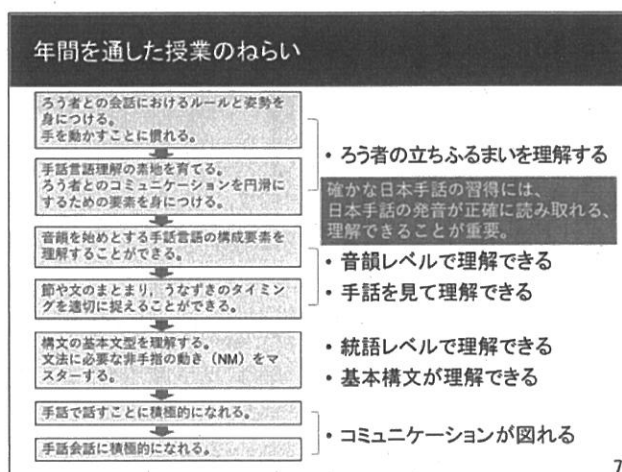
そして、談話能力。まとまりのある内容を構成し、表現する力です。

そして、方略能力。

自分の言語力・言語不足を補う機転力。この4つの力を育てていく。これらを見据えたうえで言語獲得に必要な土台を作っていきます。

そして2年次以降は日本語と日本手話を行き来して翻訳する技術、すなわち手話通訳のトレーニングに徐々に慣れていくわけです。

次に年間を通した授業のねらいと流れについて説明します。



最初は、ろう者との会話に必要なルールや姿勢を身に付けます。この時に手を使って表現する・行動することに慣れておきます。手話会話におけるろう文化のルールとは、人を呼ぶ時に肩を叩くことなどがあって、しかもそれにはマナーもある。そういった行動を覚えていくということ。

手を動かすことに慣れる、とは、手を閉じた形と開いた形などの手型あるいは手の動きの違いを識別しながら視覚を活用する行為に慣れていこうということです。手話はこういった手の動きが調音に関わるので、意識することが大事になると分かった上で、言語としての手話を学ぶ心構えが作られる。これが手話に関わる態度の基本となるところです。

次に、手話は目と目を合わせて会話を行うことが重要になります。視線が合っていない状況では、手話の場合コミュニケーションが成り立ちません。

加えて会話進行のためにはアイコンタクトも必要

になりますから、コミュニケーションを円滑にするための会話姿勢・要素をここで身に付けていきます。

次に、音韻を理解する。続けて構文レベルで手話言語の構成要素は何かを理解していく。

このようにインプットを中心に進めていく中で、音韻レベル、構文レベルの基本が理解できるように指導します。

言語獲得を考える時、まず理解が先立ちます。

自分たちが言葉を読み取れない、理解できないものに対しては自分で言葉を変換できません。ですから、日本手話の獲得で重要なのは、発音が正確に読み取れて理解できるようになることなのです。

そして、その積み重ねの上に構文習得があります。

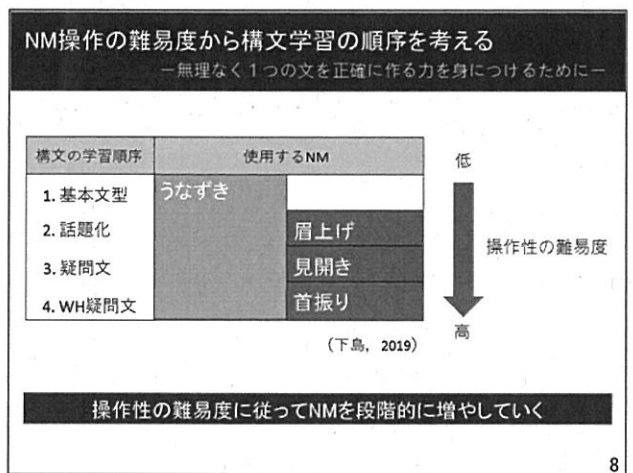
実技ではろう教員が学生と直接手話でコミュニケーションを取りながら、少しずつ会話への積極性を促す流れを図っていきます。

聞こえる学生たちは、これまで言語というと音声言語の環境でした。この授業で初めて視覚言語である手話に出会う学生は少なくないです。私達が普段の生活を過ごす中で母語以外の言語に触れるとしたら、英語が一番多く目にしたり耳にしたりしていると思います。それに、英語と日本語の共通点はともに聴覚を活用し音声を使う。言語に使う器官は一緒です。でも、手話はこの英語ほど日常生活で目にする機会はなく、さらに視覚を活用する言語です。言語に使う調音調節が音声と全く違うわけです。

そのために学生は手話を表現することに対して情意フィルターが高くなっている可能性があります。

ですので、最初の段階でハードルを高く感じることがないように、アイコンタクトやNM表示の抵抗感を和らげるためにまずは表現しやすい動きから入って、学生の情意フィルターを下げるための工夫を図る必要があります。

これらの検討をもとに構文指導では、おそらく学生にとって容易に表現できるであろう「うなずき」からNM習得を始めて、このうなずきを使った基本文型が作れることを最初の目標にしました。



例えば手話で「私は田中です」という文章を表したところ、うなずきがつきます。[うなずき]、これが最初に身に付けるべき基本NMとしました。

そして、次の段階では「私は(が)田中です」というような、「私」であることを強調した意味合いが加わるNM「眉上げ」が加わります。この話題化が次に習得するNMになります。

そして次の段階は疑問文です。

「田中さんですか」というYes/No疑問文の場合、目の見開きが加わります。

WH疑問文「田中さんはどこですか?」だと、首振りのNMが加わります。

表現しやすいうなずきから始まって、複雑なWH疑問文の首振りまでNMは段階的に重なっていきます。

このようにNM操作の難易度を考慮した上で、学生が無理なく一つの文を作ることができるよう順序を考えました。

その導入順序を挙げていきます。

基本構文の導入順序

導入順	基本構文	使用するNM
1	「アル」を用いた基本文	文末うなずき
2	話題化	眉上げ
3	ポインティング	
4	Yes/No表現	うなずき・首振り
5	質問文	見開き+あご下
6	所有格	一続きの表現
7	否定文	首振り
8	WH疑問文	見開き+首振り+うなずき(あご前)
9	WH分岐文	見開き+首振り+うなずき(あご前)
10	「～と、～と」表現	うなずき
11	文末コピー(自動詞と他動詞)	一続きの表現
12	命令文	強いうなずき 素早いあご上げ
13	条件節	見開き+うなずき
14	文末表現	
15	因果関係	大きなうなずき
16	CL	
17	RS	
18	使役表現	

「文末うなずき」で作る基本構文には「アル」を導入します。次に話題化でNM「眉上げ」を加える、ポイ

ンディングを習得する…と進みます。

そして質問文ではNM [見聞き] を加える。このように段階を踏みながら学習を進め構文を獲得していきます。

残り時間が少なくなってきました。細かな内容は休憩時間の間にも聞いていただければと思います。

続いては各課のタイトルになります。

資料をご覧ください。

「言語としての日本手話実践Ⅰ」「言語としての日本手話Ⅰ」

各課	タイトル	ねらい
1	イントロダクション	手話を見ること、手を動かすことに慣れましょう
2	手話の構成	手話の音韻・非手指動作・話題化を知りましょう
3	アル・ナイを使おう	否定文・質問文・WH疑問文を知りましょう
4	自己紹介をしよう	自己紹介をしましょう (WH分製文・代名詞表現)
5	何をしているか伝えよう	動作動詞を使って何をしているか伝えましょう
6	可能・不可能を伝えよう	出来ることと出来ないことを伝えましょう
7	得意・不得意を伝えよう	得意なことと不得意なことを伝えましょう
8	表現チャレンジ1	学んだ内容を活用して自分のことを伝えてみましょう
9	様々な否定表現①	内容にあった様々な否定表現を表してみましょう
10	今していることを説明しよう	現在進行形を使って説明してみましょう
11	時間の流れに沿って話そう	完了形・未来形を使って話してみましょう
12	様々な否定表現②	内容にあった様々な否定表現を表しましょう
13	出来事を伝えよう	文末コピーを用いて誰が、誰に、を明確に伝えましょう
14	空間を用いて伝えよう	空間を用いて距離と位置関係を伝えましょう
15	表現チャレンジ2	学んだ内容を活用して自分のことを伝えてみましょう

10

「言語としての日本手話実践Ⅱ」「言語としての日本手話Ⅱ」

各課	タイトル	ねらい
16	ステップアップ①	前期の復習
17	ステップアップ②	前期の復習
18	指示を伝えてみよう	命令文を表してみましょう
19	理由を述べてみよう	理由を述べてみましょう
20	表現チャレンジ1 伝えよう①	自分のしたいことを伝えてみましょう
21	条件節を表してみよう	条件節「〇〇ならば□□する」を表してみましょう
22	可能義務	文末表現を使い分けてみましょう (可能性と義務表現)
23	因果関係を表してみよう	①順接「〇〇なので□□した」を表してみましょう
24	因果関係を表してみよう	②逆接「〇〇したのに□□なった」を表してみましょう
25	表現チャレンジ2	ろう者の話を聞き、他の人に伝えてみましょう
26	CLを使って表現しよう	CLのしくみを知って表現してみましょう
27	複数の話者を演じよう	RSを使ってみましょう
28	RSを用いた構文を伝えてみよう	RSを用いた使役構文を表してみましょう
29	表現チャレンジ3	働いているろう者のことを知りましょう
30	表現チャレンジ4	働いているろう者のことを調べて説明してみましょう

11

最後に、確かな手話習得に向けた検討課題を考えていきたいと思っています。

確かな手話習得に向けた検討課題

- 音声言語・聴者文化を背景とする学生の特性と情意フィルターを考慮したカリキュラムと指導法
- 知識と実技指導の各意義・効果の明確化とバランスの取り方
- 指導者自身の手話言語学／第二言語習得理論の知識向上と指導法への反映
 - ねらいをおさえたティーチャートーク
 - 学習者に気づきと自己修正を促す力
 - 学習環境整備への意識
- 学習者が日本手話の音韻リズムや構文パターンを見出させるような手話モデルの提示やコミュニケーション環境習得してほしい要素の例
 - 複合語の音韻変化
 - NMのひとつである口型(マウジング・マウスジェスチャー)
- 手話言語習得適性の高い学生とそうでない学生への対応バランス

12

手話の言語獲得指導において、まず学生の特性と情意フィルターを考慮したうえで手話に対する心構えを促して、学習ポイントが掴みやすい環境を与えること。

文法操作の難易度を考慮した構文の段階的な学習を準備し、授業カリキュラムを組み立てること。

また、手話が1つの言語であることの正しい認識を今より向上させることも重要な課題です。

そして、教員は覚えさせたい構文をしっかり頭に置いたうえで、その目標言語に学生が達するまで導く実技指導力が求められます。

大学での手話学習は、基本教室内で行うものですから、教室の範囲内での言語活動が中心になります。また、手話は英語のように色々な所で見られるものではありません。しかし、教室外でも手話の言語活動に参加する、質の良い手話動画を多く見るなどしてインプット量を上げていき、構文のパターンを自分の中で体得し確かなものにする 것도 大事なのです。これをどうするか。

こういった学習環境についても今後の検討課題として取り組んでまいりたいと思います。

今回はこのように作り直したテキストを活用した授業実践の成果を改めて皆さんに報告できればと思います。

2. 事業成果報告

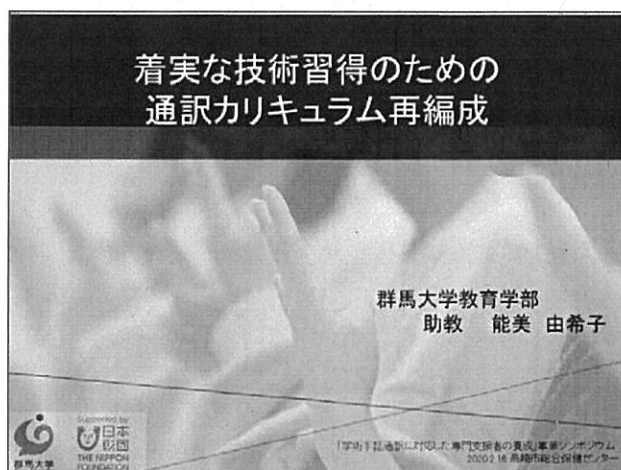
着実な技術習得のための通訳カリキュラム再編成

能美 由希子

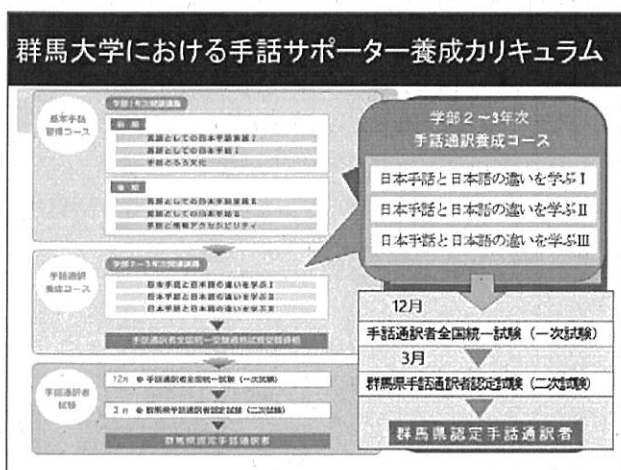
群馬大学 教育学部 障害児教育講座 助教



下島からバトンを受け取りました。



「着実な技術習得のための通訳カリキュラム再編成」というテーマで群馬大学教育学部の能美からご報告いたします。



先ほどの下島の報告では、1年生の手話習得コースの話がなされました。

私の報告では、1年生が2年次に上がって以降、2～3年次で通訳養成カリキュラムを修了し、群馬県認定

手話通訳養成コースについて

手話通訳養成コースの概要

■到達目標

各都道府県必須事業の手話通訳者養成カリキュラム修了相当

- > I (2年前期) : モデル通訳を参考に、一部単語を変更した題材の逐次通訳ができる
- > II (2年後期) : 様々な題材の逐次通訳ができる
- > III (3年前期) : 自分が履修した講義の同時通訳ができる

手話通訳者の受験資格を得られるまでの話をします。

2～3年次で設けている手話通訳養成コースの概要です。到達目標は各都道府県の手話通訳養成カリキュラムの修了相当としています。

2年前期では、モデル通訳を参考に一部単語を変更した題材の逐次通訳ができる。2年後期では、様々な題材の逐次通訳ができる。3年前期では、同時通訳ができることを、到達目標にしています。

1～3 年修了した段階で手話通訳養成カリキュラム修了相当ということで、実際に技術習得の順序はこのカリキュラムとは少し順番を組み替えています。

学生たちは、今年度は 1～3 年まで全員揃っていて第 1 期生の 3 年生がこの授業を修了しました。

本学における背景

■手話通訳養成コースの学生の履修状況

教育学部障害児教育専攻の学生がほとんど
基礎免許と特別支援学校免許の両方の取得を目指している

- ▶教員免許取得に必要な授業科目の履修
教科に関する科目、教職に関する科目、特別支援教育に関する科目
- ▶教員免許取得に必要な実習科目の履修
授業実践基礎学習（2年次）
教育実習事前事後学習（3年前期）

■上記に加えて、「日本手話と日本語の違いを学ぶ」にて、手話通訳技術の基礎を習得し、日本手話の言語スキルを補強していかなければならない

本学における背景として、手話通訳養成コースを受けている学生は、現状、教育学部障害児教育専攻がほとんどです。つまり、基礎免許と特別支援学校両方の取得を目指している学生が多いということになります。教職免許の取得に関する授業の履修に加え、2～3 年次では、実習・見学、その事前事後指導があるというかなりタイトなスケジュールにある中で、手話通訳の技術を身に付けなくてはならない状況です。

加えて、今の 2～3 年生は下島テキストがない状況で学んできたという状況にあります。ですから、2～3 年次の通訳養成コースで手話通訳の技術を学びながら、日本手話の言語スキルを補強していく必要がありました。

今年度のカリキュラムで力をいれたこと

■翻訳

▶ラベル文の作成を行い、通訳プロセスを切り分けて練習

■学生の心理的サポート

- ▶学びのモチベーションに対するサポート
- ▶教員採用試験の加点についての情報提供

■上記を踏まえた指導内容・方法・教材の検討

その上で、今年度のカリキュラムで力を入れたこととして、翻訳と学生の心理的サポートを挙げています。

例えば、学生からはいろいろな訴えがあります。1 年生が下島テキストで学んでいるのを見て、2～3 年生から「このテキストで学んでみたかった」という声が上がったりします。

3 年前期の授業では実際に授業に出向いて、通訳の練習をしています。とりあえずやってみただけ、できないことは自分でも分かるが、何がどうできなかったかはイマイチ整理できない。「どうしたらいいのかわ」という訴えも多々ありました。

そして、今年度は翻訳と学生のサポートを主にして、それらを踏まえ、言語スキル、通訳スキル、両方を伸ばすための指導・授業実践を行ってまいりました。

授業の各回の構成（「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」共通）

■宿題：週3回（3種類）提出

■授業

- ① 単語：
徐々に語彙を増やし、正確な音韻と表出リズムへの意識づけ
スムーズな表出ができるまで繰り返し練習
- ② 文法：
NM表現を中心に、文法についての理論的解説
学んだ知識の定着を図るための繰り返し練習
- ③ 課題フィードバック：
良い例を参照しながら、なぜ良いのか理論的解説
訳出ミス（主に意味理解に影響を及ぼすもの）の指摘
学生の習得状況に応じた個別指導
- ④ リアクションペーパーの記入：
学びに対する言語化と内省の促し

■授業外での個別指導・相談対応

各回の授業構成です。青枠は、今年度新たに入れた部分です。

まず、単語としてフラッシュカードをしました。パッと見て訳せるか、パッと表現できるかなどスムーズな表出を意識してやっています。

昨年度、学生には「手話検定試験の勉強をやってね」という声かけをしました。学生の自主性に合わせて語彙を増やしていましたが、実際に通訳技術のスムーズに習得を考えると授業の中でも単語を扱う、そしてそれをスムーズにできることを狙っています。

NM 表現を中心とした文法の解説も入れています。

それから、課題フィードバックの中で 2～3 年生になると学生個々に身に付けているスキルの個人差、個人の特性もありますし、得意・不得意などいろいろな差が出てきます。それぞれの個々の学生の習得に応じた形で個別指導を取り入れています。

授業の中では質問しない学生から、「これを教えて欲しい」という声かけもあったので、授業とは別に個別指導や補講、相談という対応も行っていました。

各授業のカリキュラム内容

■通訳スキルを身につけるために必要な通訳理論と指導の順序

- ▶ I : 逐次通訳のシャドーイング練習
言語スキルの定着のための繰り返し練習
通訳作業への意識付け
- ▶ II : 翻訳トレーニングを積み重ねた上での逐次通訳
言語スキルの向上
短文メッセージの保持・翻訳スキルの習得
- ▶ III : 逐次通訳から同時通訳へ
OJTを通じた、実際の通訳状況での通訳・現場対応スキルの習得

I～IIIの各授業のカリキュラムです。今年度力を入れたところと新しいところを青枠で囲っています。

IIの翻訳トレーニングは、日本語と日本手話をどのように変換すればいいのかを意識づけできるように行っています。

3年前期のIIIの授業は今年度初開講です。OJTと書いていますが、これは、学生が自分の空きコマに手話通訳の練習を行うことを許可してくれている先生の授業に出向いて、通訳練習を行うことです。通訳に対して自分で振り返りができるように、通訳のビデオ撮影と報告書の提出を課しています。

日本手話と日本語の違いを学ぶ I



2年前期「日本手話と日本語の違いを学ぶ I」では、基本的に逐次通訳のシャドーイングを行っています。

学生には『手話通訳レッスン』宮澤 典子さんのDVDを指定教材として、各回で課題を指定し、シャドーイング動画を提出してもらっていました。ですが、学生から「NM 表現をもうちょっと確認したいのだけれど、このDVDの速度では見切れない、ちょっと早い、シャドーイングが追いつかない」という声が上がりました。動画を作り直しました。

著作権の関係で宮澤先生のDVDを勝手に0.5倍速にすると問題があるので、同じく授業担当教員の川端がスロー動画を作りました。

ご覧下さい。(動画再生)

かなりゆっくりなペースだなというのは、見て実感していただけたと思います。これが実際のDVDの、0.5倍速ぐらいです。0.5、0.7倍速と刻んで編集して、学生が自分で見て分かる速度でまず見る。その上で、目指すべきは元々の速さの1倍速です。まずは自分が分かるスピードでちゃんと見て、慣れたら徐々に1倍速を目指し、速さに慣れていくという練習を積み重ねてきました。

日本手話と日本語の違いを学ぶ II



△/場所/何 wh /群馬大学/昭和グラウンド△//

△/天気/注意/何 wh /晴れ cond /やる△/雨 cond /中止△//

2年後期「日本手話と日本語の違いを学ぶ II」です。

こちらでは翻訳トレーニングを積み重ねた上で、逐次通訳を目標とします。

通訳作業をいかに学生に意識してもらうか。NMを落とさずに翻訳できるか。いかに意識してもらうかを考えて、訳出をする前に、キチンと思考してもらう、訳出の計画を立てるところにポイントを置いて、課題設定しました。

左上の写真は、授業で繰り返し練習をしているところです。ペアを組んで、自分がやっていない間はやっている人を見る。文法解説やポイントは話してあるので、そのポイントがキチンと分かっているのか、意識しながらお互いに見る、見せるという練習をします。

右上の写真は、授業でのフィードバックの様子です。学生には動画課題を提出してもらっていて、担当教員と研究スタッフがチェックし、これがいい、これはもうちょっと課題があるかな、説明を入れたほうがいいのかもと、検討を重ねます。その上で、授業の中で、良い動画を紹介し、何がいいのかを解説します。

スライド一番下は、学生が実際に提出した課題のラベル文です。NMやうなずき、口型がどうなっているかを確認して繰り返し、どうすればいいかを考えてもらった上で、課題を提出してもらっています。



3年前期「日本手話と日本語の違いを学ぶⅢ」です。逐次ではなく、同時通訳としてOJTを行い、実際の通訳や対応スキルの習得を図っています。

左上の写真、たまたま空きコマが重なっていたので、教室の後方全部をOJTの学生が陣取っています。10分間など、通訳時間を指定しています。OJTは、空きコマに行っていますが、授業内容や先生の話方など、教材の難易度としては少し難しい場合があります。その場合は、担当教員にお願いして事前打ち合わせを設けてもらいました。それが右上の写真です。授業前に実際にどういう話をするのか。「これがポイントだ」ということを授業担当教員から直接聞いて、内容をある程度整理した上で、OJTに臨む。これらの対応、いわゆるコーディネーター的対応は、授業担当教員である私が行いました。

スライド一番下、学生の報告書を紹介します。『講義後にプロジェクト室でその日の通訳について「あだ」「こうだ」「こうなった時はこうすれば良かったのかな」「あそこが難しかった」と言い合う時間が学びになっているのでは』という報告がありました。

学生ができなかったとか、こう教えてほしかったという内容は、授業で解説しています。その中で、単にできなかった、だけではなく、この単語の表現に時間がかかってしまったので、その次のところが全然表現できなかったんだとか。OJT前に設けて下さっている打ち合わせに都合で行けず、内容の整理ができなかったと、いうように、学生自身がある程度整理して、

気づきや反省が学べるという状況になっています。

フィードバック



全体フィードバックは、全員に習得してほしい技術について、授業の中で行っています。

一方、個別フィードバックも行っています。その際、「ちょっと今の課題はキツイ」「課題が難しいけどどうにかできないか」などの声がかかることもあります。このように、個別フィードバックは、技術面だけではなく、学びのモチベーションに対する心理的サポートも含んでいます。

ある学生の例を挙げると、手話ができないということに本人の意識が向きすぎてしまっていました。本当はカメラ目線で撮らないといけないし、通訳をするならカメラを見なければいけないのに、自信がなくてカメラを見られない。カメラへの意識ではなく、目線をあげて撮ってみるように促し、実際に目線が上がっている自分自身の動画を見てもらい、「できるよ」というような声かけをしました。

通訳試験対策講座

■手話通訳士試験対策講座：2～3年生対象

■手話通訳者全国統一試験対策講座：3年生対象

- ▶学科対策・実技対策
- ▶どちらも、出題範囲の確認と過去問を使用した個別指導
- ▶2年生は「手話通訳士試験」の学科合格を目指す

今年度、1期生が通訳養成カリキュラムを修了したので、通訳試験にチャレンジするという学生も出てきました。全国統一試験はまだ結果が出ていないので、